２０１０年　秋の沢集中山行

中央アルプス・空木岳集中

■　荒井沢～小荒井沢～大荒井沢篇

メンバー　Ｌ：野澤　隆
　　齋藤　広明
　　劔持　久美子
　　記録：早川　尚武

計画概要
１日目：荒井沢遡行
２日目：小荒井沢下降～大荒井沢遡行
３日目：大荒井沢～池山尾根下山

第１日目

９月１７日　２３：００　本厚木駅
　１８日　　２：３０　菅の台
　　駒ヶ根スキー場駐車場
　　仮泊
　　５：００　起床
　６：３０タクシーにて移動開始
　三本木駐車スペースに駐車後、
　入渓点へ移動。７：２０到着
　７：５５遡行開始

同じ流域の沢を遡下降し、沢を繋げていく、アイディアとしては非常に面白い継続遡行の計画である。ただし、正直な感想としては、継続遡行の開始対象とした沢は、とてもわざわざ行く様な所とは思えなかった。元より中央アルプスは、沢筋の崩壊が昔から激しく、荒井沢周辺も、国土交通省により砂防事業区域に指定されている。大きな疑問と不安を抱えながらの山行参加となった。

菅の台でタクシーを拾い、一旦三本木の仮駐車場まで移動。車を置き、そのままタクシーで入渓点まで移動する。砂防ダム築造工事の状況で、林道がどこまで入れるかまでは、調べていなかったが、とにかく行ける所まで行く事にする。

案の定、入渓点手前約２ｋｍで施錠されたゲート。やれやれ、と思うまもなくすぐ後ろから工事関係車両。タクシーであればすぐ帰ると見て、中に入れさせて頂いた。入山早々、なんてドラマチックな出来事か。

無事に林道終点まで車で入る事ができた。身支度を整えて沢床に降りる。取水口のすぐ横に降りる踏み跡があり、トラロープがぶら下がっている。荒井沢の出合いはすぐ目の前。小さなかわいらしい滝が見える。思っていたほど荒れてはいない。しばらく登ると、土石流対策のワイヤーセンサーが張ってあった。

歩き始めて３０分、劔持さんが、足を滑らせて手をついた時に右手を負傷。少し体が重く感じている様だ。もう少し進んで様子を見ると顔色が悪い。分けられる装備類を分担し、その後の行動は状況判断による事とする。

荷物が軽くなり、体が温まってきて、調子が良くなってきたようだ。予定通り進めそうである。まずは一安心。

２・３m位の小滝が所々現れる。それほど荒れた感じはしない。倒木も少なく、沢が倒木で埋まるほどの奥秩父の沢に比べれば、よっぽどきれいだ。当初の心配は杞憂であったのかも知れない。

～ナース☆サイトウ　ナイスです～

（∂ν∂）

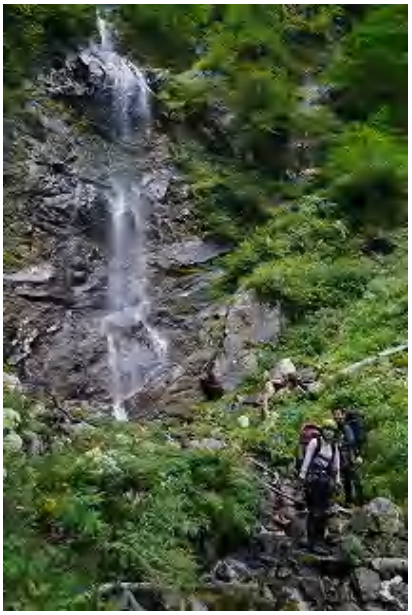
その後は順調に進む。途中に出てくる滝も案外に楽しい。

９：００　４ｍ
～水中突破を楽しむリーダーの図～

１０：５０二俣。右へ進めばマセナギへ到達するはずである。左へ進む。

１１：０５　７０ｍ大滝下。

見事な滝が掛かっている。遡行図では３段となっているが、離れて見てみると、上部にもう１段あるのが見えるが、正確な落差と段数は判断できなかった。いずれにしても直登は不可能なので、右から巻きに入る。



～上部にもう１段見える～

巻き道がついている。なぜか。巨大な落石で、草が踏みしだかれているから。見れば、落ちてきたらヤバそうなのがまだ引っ掛かっている。落ちて来るなよ。

嫌らしい泥壁を、齋藤登攀隊長の巧みなリードで問題なく詰めていく。結構シビレル登りだ。よくこんな所をリードしていくなぁ、と感心してしまう。

登り切って、やや平坦な場所があったので、小休止。沢床へ降りる下りは問題無かった。

降りたってすぐに、落ち口に岩が引っ掛かっている６ｍ程度の滝がある。ビレイして越える。ランニングでハーケン１本打設。

～１２：５５　６ｍ～

ここから次第に傾斜が増し、源頭近くの荒れた様相を呈してきた。谷はV字状に狭まり、砕石の様な落石が堆積している。足下はガラガラ、大きな岩が、岩小屋を成しているのが時々出てくる。気を付けていても、どうしても落石を起こしてしまう。「ラァークッ！」の声の合唱隊だ。割れて尖った石、当たれば痛い。

～岩小屋～

ガレ場が続く。大きな大きなチョックストーンがあり、その脇をボルダリングの要領で抜ける場所があった。空身で登攀隊長が取り付く。って、そこをノービレイですかい？

～１５：０６～

荷揚げして無事通過。なかなか手強くなってきた。後はガレ場の連続。何を登っているのか、良く分からない。

かなり下の方で、雨合羽の上着の様な物が土砂に埋もれているのを見つけたが、今度は途中で登山装備が落ちているのを見つけた。食料類の残滓や、凹んだコッヘルと水筒。不思議と一塊りになっていた。尾根からの滑落者の遺留品と判断できる。とりあえず分担して回収する。

点々と落ちている。ピッケルにスコップ、カメラ、衣服用のコンプレッションバッグ。最後は積雪期用の登山靴だった。地図の切れ端が、目印の様に続いていた。

幸いと言っていいのか分からないが、本体には遭遇せず、登り切る事ができた。

１６：５０池山尾根登山道。最後まで気が抜けず、登山道でロープを出して確保。ちょっと珍しい光景ではないだろうか。

～幕営は登山道にて！～

第２日目

４：３０起床　７：００出発

少し出発に手間取っただろうか。
登山道からいきなり谷筋に入ると、ルートが難しそうなので、しばらく尾根筋を進み、地形がはっきりした所から下降に入る。
下降開始８：００

～下降開始～

草に覆われたガレ場を、懸垂を入れながら下降を続ける。慎重に懸垂支点の位置取りをしないと、次のピッチに移行ができない。声を掛け合いながら進んで行く。
最後に大きな涸滝の上に出た。懸垂支点は倒木１本。スリング１本捨てて支点にする。バックアップは取ったが、最終下降者はそれを外さなくてはならない。支点の効きを何度も確かめた。

～懸垂支点～

～来し方を顧みる～

下降の核心は、無事に通過した様だ。後は大荒井沢の出合いまで気楽に歩く。途中には、支沢の見応えあるきれいな滝が目を楽しませてくれた。いい雰囲気じゃないか。

～１０：１５　側壁の滝～

２m程度の小滝をいくつか過ぎて、沢を分ける尾根が次第に低くなり、出合いが近づいてきた事を知らされる。振り返って考えてみて、「遡行価値」と言う言葉を使えば、その様な対象ではないであろう。しかしながら、古い時代の探求的な沢登りをしている、冒険的な味わいがあり、いつの間にかに楽しんでいる自分に気が付いた。学生時代に、泥んこの中を這いずり回って喜んでいたのを思い出してしまった。なかなか秀抜な計画ではないか。自らの不明と無智を恥じ入るばかりである。

１０：４５　大荒井沢出合い。
ここから曇りの滝までは、特に悪場は無く、大きな岩が転がる横をすり抜ける様に進む。

１１：１５　大岩の分岐。右へ。

～１２：４０　曇りの滝下部にて～

曇りの滝、見所ではあるが、これから先が厄介な高巻きである。ルートが見つけにくい。２年前に来た時、体調不良で途中でへばった苦い思い出の場所だ。
相変わらず、登攀隊長リードで着実に進む。草付の急傾斜をやや左に、岩峰の基部に出た所で右に、大きなクラックを抜け、岩と樹林の隙間の様なルートを詰める。うまく抜けられた。隊長、お見事。

～大きな岩が立ち塞がる～

～１４：３６　沢床へ下降中～

約２時間の高巻き。悪くない。
沢床に降りたってすぐに巨大チョックストーン滝。登れない。小さく巻く。ちょっとしたオチかな。
面白いのが、かなり上部までチョックストーン滝が続く事。特徴的だと思う。

沢登りらしい沢登りを楽しむ。手頃な滝が次々に現れる。みんな、いい顔している。

天場適地が見つけられず、１６：３０行動停止。ちょっとした平場を、整地にかかる。おお、野澤さん、人間ブルドーザー！大きな岩をどんどん動かしていくではありませんか。お陰で、昨夜と打って変わってとても快適な天場の出来上がりです。

～Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ！～

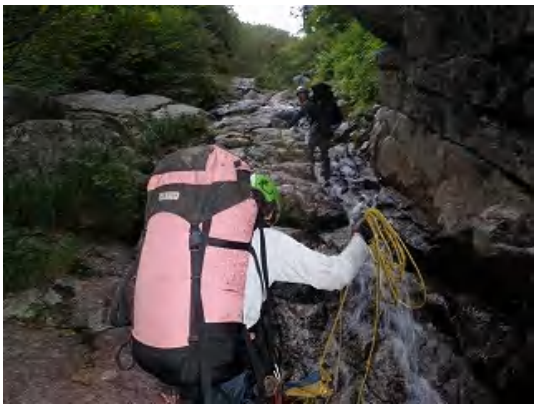
今夜はカレーライス。おお、またもびっくり、野澤さんのザックから、ジャガイモ、タマネギ、ニンジン、その上焼き芋用のサツマイモまでゴロゴロと。ここまで担ぎ上げたその馬力、感服致しました。

第３日目

４：００起床　６：００出発

　天場のすぐ目の前、２mほどの小難しい滝。朝イチがこれだ。寒いし・・・。
　ナメ滝を織り交ぜながら気持ち良い滝がどんどん出てくる。振り向けば、遠く南アルプスの山並みが蒼く連なる。

～塩見岳遠望～



　そしていよいよフィナーレ、２０m滝。ここは、落ち口でちょっと迷うトコロ。皆、無事に登って滝は全て終わった。

８：４０　避難小屋到着　休憩
９：２０　空木岳山頂へ向けて出発
１０：０５　駒峰ヒュッテ
１０：２０～１０：３０　空木岳山頂

～登攀隊長は山頂まで来なかったです～

避難小屋まで戻り、他のチームの到着を待つ。大荒井沢チームは無線連絡が取れていて、およその時間が分かっているので、安心して待てた。

～１２：１０　大荒井沢チーム到着～

問題は中田切本谷チーム。途中支沢から丸山尾根を越える、との交信ができたが、その後の連絡がつかない。さすがに気を揉む。
皆、落ち着かない気持ちで小屋の周りをウロウロし、齋藤さんが様子を見に行ったりしていたが、なかなか消息がつかめないでいた。
そうしているうちに、ついに無線に西村さんの声が飛び込んできた。随分息を切らしている。とにかく無事に尾根の上に出られた様だ。これで一安心。時間遅れではあるが、とにかく集合できた。

～中田切本谷チーム無事合流～

～全員集合！～

１４：１５中田切本谷チーム合流
１５：００下山開始
車回収チーム先行１８：３０林道
回収後合流　１９：３０後発下山チーム
林道到着

　平本さん、齋藤さんと共に、車回収のために先行した。秋の日暮れは早い。駐車スペースに戻った頃、月が皓々としていた。
　帰るべき街の灯が、点々と見える。

山行を終えて

　非常に充実した、中身の濃い山行となった。当初計画を聞いた段階では、こんな所に何しに行くのかと思い、参加をやめようか、と考えたほどであった。これは自分の浅慮による。まさに汗顔の至りである。

　１日目に、遭難者の遺留品に遭遇してしまった。重い体験であり、色々と考えさせられる出来事である。沢は水の源、生命の源流であるが、また、それが消えゆく場所でもある。生死は常に交錯している。時に自らを省みなければならない。
　最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。
　いかなる草葉の上に落とすべき露命いずれにあるか。